

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（沖縄県農業試験場宮古支場）

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017100

研究室紹介 (沖縄県農業試験場宮古支場)

沿革

宮古支場は、沖縄県糖業振興の一策として昭和2年宮古郡内にサトウキビの苗を供給するため沖縄県糖業試験場宮古苗圃として設置されたのが始まりである。昭和15年には、沖縄県農業試験場宮古支場に改称され、サトウキビ、甘藷等普通作物の試験も開始された。大戦後の昭和22年、荒廃した産業を勃興するため宮古民政府産業試験場として優良種苗の配布に着手。農業、水産、農芸化学部門を置き試験業務が開始された。昭和25年琉球農林省が発足し、琉球農林省宮古農業研究指導所と改称された。昭和27年、琉球政府が発足し、琉球資源局宮古農業研究指導所と改称、昭和28年に地域の農業指導所が統合され中央農業指導所と改称された。昭和36年、機構改革により宮古農業研究指導所は琉球農業試験場宮古支場となる。昭和47年の本土復帰に伴い沖縄県農業試験場畑作利用室となる。「室」になってからは文書、書類、決済上に不便・不合理（室長では決裁権が殆どない）が生じたため昭和53年に再び宮古支場（支場長に決裁権）に改称された。同時に作物研究室と営農研究室が設置された。平成2年には、地域の強いニーズにより研究の強化を図るため、営農研究室を園芸研究室に改称し現在に至っている。

(仲宗根盛徳)

作物研究室

現在、作物研究室は室長1名、主任研究員1名、研究員2名、農業技術補佐員4名の計8名で構成され、宮古のサトウキビに生じる様々な問題に対応している。

平成11年度の研究課題は、本場から送付される約1万個体のサトウキビ実生を播種、育苗して本畑に移植する実生個体選抜試験に始まり、2次選抜、3次選抜、4次選抜、5次選抜、系統適応性検定、奨励品種決定

と続く一連の育種関係試験の他、気象感応試験、地下水環境への負荷軽減と施肥省力化を目的とする緩効性肥料に関する試験、スプリンクラー及び地中点滴等のかんがい試験、不萌芽に対応する植付け時期別試験、地力維持のための緑肥試験、そして平成10年度に収穫皆無の立ち枯れ圃場を生じ、被害が顕在化してきた新たなコガネムシ類の生態解明と防除対策に関する試験、その他、除草剤や殺虫剤委託試験、ケナフ等新規品目に関する試験等多岐にわたっている。

これまでの主な成果として、

- 春植サトウキビの輪作による株出栽培
- 品種「Ni9」、「Ni11」の選抜育成
- 宮古地域におけるサトウキビ品種構成の適正化
- 宮古地域におけるクロコガネ属の1種によるサトウキビへの加害

等があげられる。NCo310が宮古地域のいわゆる低ブリックス問題で衰退して以来、品種の多様化が進んだが、平成6年産サトウキビの品質取引が契機となって早期高糖性のNiF8が地域の6割を占める主要品種となってきた。と同時に茎数の減少傾向が目立ち、反収の低下が懸念されている。当研究室では、宮古地域の生産性を上げるために、いかに茎数を確保するか、という共通の認識の下で各研究員の課題が実施されている。そのため、地下部に対する関心が高まり、最近の作物研究室で課題は違っても各人がサトウキビを株ごと掘り起こし、土を洗い流した後で根や地下芽子、分げつを調べたり、根群分布を見るために地下深く掘ることが流行っている。このような基礎的調査が今後の地下ダムかんがい施設の拡充や、圃場整備という農業条件の変化や高齢化に伴う農業経営の変化に対して生じるサトウキビ栽培上の問題点の解決につながると考えている。「汝の足元を深く掘れ」が宮古支場作物研究室のキーワードである。(伊志嶺正人)

園芸研究室

本研究室は、現在、室長1名、主任研究員1名、研究員2名、農業技術補佐員3名、およびパートタイム2名体制で運営されている。昭和53年～平成2年頃は、宮古地域に園芸作物を定着させるため、主に輸送性や生産性を考慮した品目の導入試験や所得向上のための営農試験が行われた。しかし、最近ではこれに加え、島尻マージのアルカリ性土壌に起因する作物栄養障害改善のための試験研究及び地下水保全を視野に入れた施肥試験及び灌漑用水を有効に利用するための試験研究を行っている。平成9年度には、九州でも有数のライシメーター24基を有する施設が完成し、圃場からの硝酸性窒素流出を軽減するための基礎的なデータを収集している。また、本地域では、10年ほど前までは経済的な果樹生産はほとんど行われていなかった。そこで、パパイヤやマンゴーなどの栽培技術確立のための試験研究も行うようになった。

これまでの最近の主な成果として

- メロン施設における地力維持技術（緑肥効果、ミニマム施肥）
- ニガウリの作型別適正品種の選定と栽培技術（栽培密度、被覆資材、台風対策、台木）
- ニガウリ果実の生育特性（市場における黄化発生防止のための基礎的調査）
- パパイヤ果実の収量と品質の周年調査
- マンゴーアルカリ障害軽減のための基礎的調査、など多数

ここ数年、著しく生産が伸びているニガウリに関する試験研究成果は、育種を除けばほとんどが本研究室から生まれている。パパイヤは、宿敵の台風やウイルス病が蔓延しているため施設栽培によらなければ付加価値の高い果実を安定生産することができない。しかし、本県での周年栽培を前提とした生理生態の解明や施設を利用した栽培技術などの試験研究は、これまで大きく立ち後れている。そのため、当研究室では、4年以上もの間、毎週果実収量と品質などの調査を忍耐強く続けている。高さ4.5mの果樹網室には、らせん

状に仕立てられた5年生パパイヤ樹が、大蛇の如く寝ている。

本研究室の運営において留意すべき特徴として、試験研究を支えている農業補佐員とパートタイムは職員であると同時に、農家の重要な労働者の一人でもあり、地域の文化や伝統の継承者たちでもあるということである。彼らは、伝統芸能であるクイチャーや国指定無形文化財となっているパーントゥを守り、定期的に行われるスポーツ大会などに参加し地域活性化の一翼を担っている。これらのことは、島外者の多いノンポリ研究員には刺激的である。試験研究課題の設定にあっても、彼らの意見を取り入れ具体的で現実的なテーマを取り上げることとなる。言い換えれば、研究室を引っ張っているのは、研究員ではなく彼ら地元の人たちなのである。このことが研究員を刺激し、能力を超えて基礎研究や応用試験に取り組み、研究室をアクティブにしている。

最後に、極めて重要なことであるが、収穫祝い、島外からの訪問者の歓迎会、試験研究の設計や成績検討会後の反省会などと称して物事の節目にしばしば回されるオトーリは、職員の慰労と地域経済活性化に少なからずも貢献している（と思う）ことを忘れてはならない。

（河野伸二）